

「イスラエル建国史」

40 独立闘争 6

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト (<http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/>) で公開しています。

【これまでの流れ】

1947年11月の国連決議でパレスチナ分割案が採択され、ユダヤ人国家の建設が国際社会によって正式に承認されることになった。その決定にユダヤ人社会は沸き立ち、歓声を上げた。しかし、すぐに大きな試練がやってきた。アラブ人によるテロが相次いだのである。それは、アラブ正規軍による侵攻の前触れでもあった。

履行作業に着手できない国連委員会

パレスチナ分割決議は採択されたが、次はこれを履行しなければならない。それを担当する組織として、国連総会はパレスチナ・コミッションを設立した。5ヶ国（ボリビア、チェコスロバキア、デンマーク、パナマ、フィリピン）で編成される委員会である。

パレスチナ・コミッションは、英委任統治政府から権限を引継ぎ、ユダヤ・アラブ間の境界線を詳細に画定し、両国の臨時行政府を設立し、議会選挙を実施するなど、国家としての体裁を整えたうえで、アラブ・ユダヤ双方の国に権限移譲するのが、任務であった（ユダヤ人社会は既に国家体制を整えていた）。

この一連の作業は、治安維持が大前提であった。そのカギを握るのが英軍である。その英軍は、1948年8月1日以前に撤収し、同年10月1日以前に撤収を完了するとされた。つまり、パレスチナの英委任統治は8月1日以前に終るということであった。パレスチナ・コミッションは、英政府から具体的協力の言質をとることができず、レークサクセスの国連本部で待機を続けた。

決議履行に無関心のイギリス

そのイギリスでは1947年12月11日の下院でグリーチ・ジョンズ植民地相が、パレスチナ委任統治は1948年5月15日に終了する、と報告した。一方ベビン外相は、撤収まで僅かの時間しかないが、この間も移民割当て政策は堅持するとしたうえで、国連決議の執行は他国に任される、と政府の非協力姿

勢を明らかにした。そしてベビン外相は、「この決議は、加盟国のひとつが不法で正義にもとる、と指摘している。この見解は、23ヶ国が支持しているのである（反対票を投じた国13、棄権した国10を指す。13ヶ国のうち10ヶ国はアラブ・イスラム教国）。決議に賛成している世界のユダヤ人口は1,000万程度。反対側のイスラム世界の人口は2億である」と指摘した。アラブ・イスラム世界重視を伺わせる主張であった。

暴動ではない、戦争だ

パレスチナ分割決議が採択された時、国連事務総長であったトリグヴェ・リー大使は、当時を振り返り、「1947年12月の第1週から、パレスチナの騒乱が大きくなり始めた。アラブ側は武力によって分割に抵抗すると繰り返し公言していた。彼等はパレスチナのユダヤ社会に攻撃を加え、分割決議紛争を貫徹する決意のようであった」と回顧している（「平和の大義」1954年）。

1947年12月1日、アラブ高等委員会が3日間のゼネスト^{*1}を宣言した。その翌日約200人のアラブ暴徒が、エルサレムの商業センターを襲撃、商品を略奪し放火した。これによってユダヤ人経営の店舗40が焼失した。

スコーパスの丘にあるヘブライ大学のキャンパスでは、それを目撃した学生達がいた。そのひとりウージ・ナルキスは、次のように述べている。

「1947年12月2日、講義の合間に外に出てみると、キングデービット・ホテルの近くにある

エルサレム商業センターが炎に包まれていた。イスラエルの独立戦争が始まったのだ。その日を期して私は学業生活に別れを告げた」。（ナルキスは、パルマッハ隊の一員として6月17日のナイト・オブ・ブリッジ作戦—鉄橋と陸橋計10ヶ所の破壊—に参加し、六日戦争時は中部軍管区司令官としてエルサレム再統一を果たした人物である）。

1948年1月8日、ベングリオンはマパイ党中央委員会で状況を分析し、「これは暴動ではない。本物の戦争である。彼等の意図は三つある。第1が、ユダヤ人社会の殲滅。彼等は、自衛力のあるユダヤ人社会が存在する限り、この地域の独占支配が不可能であることを認識している。第2が、分割決議の履行阻止、即ちユダヤ人国家の独立阻止。如何に小さくても主権を持つ存在を認めない。第3は、以上の二つが達成できない時、ユダヤ人国家の領域を極力圧縮する意図である」と総括した。市民の多くがナルキスやベングリオンと同じように、戦いを覚悟した。

アラブ高等委員会傘下の組織が各地でテロを起し、今や全土が騒乱状態になった。パレスチナ・コミッションは、1948年1月にスペインのパブロ・アズカラ前駐英大使を団長として、先遣隊が現地入りをしたが、治安状況は既に



トリグヴェ・リー大使



アラブ解放軍

この委員会ではどうにもならない事態になっていた。1948年1月18日までに、死者720名、負傷者1,532名（英軍兵、ユダヤ人、アラブ人の合計）の被害がでていたのである。

三つのアラブ不正規軍が侵攻―情勢は混沌

アラブ高等委員会の主導するテロが第1段階とすると、第2段階がアラブ不正規軍の侵攻、第3段階が正規軍の侵攻である。

1948年1月10日、北ガリラヤ地方のキブツ・クハルショルドにアラブ兵が攻め込んできた。兵力約900、近くに駐屯する英軍部隊の協力でキブツ警備隊はこれを撃退した。捕虜になったアラブ兵は、アラブ解放軍の隊員であると自供した。

アラブ解放軍は、アラブ連盟がつくった不正規軍であった。当時パレスチナはまだ英政府の統治下にあり、正規軍の派遣ははばかれるので、直接責任を問われることのないゲリラ部隊を送ることにしたのである。

アラブ解放軍はダマスカス郊外に司令部をおき（後にガリラヤ湖岸のティベリアに進出した）、司令官は名目上イラク軍将校タ

ハ・アルハシミであったが、実際の戦闘指揮はシリアのファウジ・カウクジがとった。カウクジはトルコ軍出身で、1936年のアラブの暴

動に参加し、群小の武力組織を統合しアラブ革命軍をつくろうとして失敗、第二次世界大戦時はドイツに逃げていた人物である。パレスチナの北部にはこのアラブ解放軍（兵力約7,000）、南部にはエジプトから来たムスリム同胞団（同2,000）、中央部にアラブ高等委員会（議長アブダル・カデル・フセイニ、ハッジ・アミン・アルフセイニの甥）の救世軍（同1,000）が行動し、開拓村を襲撃、交通線を破壊していた。解放軍には、元ナチ兵、ポーランド軍（アンデルス部隊）の将兵、英軍脱走兵、チェルケス族な



ど雑多な出身者が含まれていた。

人口65万のユダヤ人社会は、4万5,000人の兵力を確保できたが、その3分の2は戦闘訓練を殆ど受けておらず、開拓村の警備程度の能力しかなかった。そこで、根こそぎ動員をかけてあと4,000人を確保、合計2万弱で7個旅団を編成し、これでユダヤ人国家として割当てられた地域を守ることになった（他に武装組織イルグン4,000、レヒ800が別個に行動していた）。

交通線の破壊で各地の開拓村は孤立し、エルサレムもテルアビブへ至る幹道を遮断されて、孤立していた（分割決議の採択後4ヶ月間でユダヤ人社会の死者数は900人を越えた）。

アラブの攻撃でパレスチナ情勢は混沌としてきた。

国連決議の撤回を決意したアメリカ

英軍の撤収は後1月余に迫っている。つまりアラブ正規軍の侵攻が間もないということである。このような状況の時、アメリカの国務省が分割決議の撤回を

考えていることが判った。1948年3月19日アメリカの国連代表部が国連安保理宛に、パレスチナ・コミッションの作業を中止し、信託理事会によるパレスチナの暫定信託統治を提案した。アメリカの作業文書は4月16日の国連総会第1部会（政治・安全保障委員会）に提出された。

ジョージ・マーシャル国務長官は、シオニスト執行部の外務担当モシェ・シャレット（初代外相）を国務省に招致し、

混沌状態を指摘したうえで、アラブ7カ国の正規軍に攻め込まれる危険性を強調した。シャレットが執行部の決意を語ると、独立して自衛するもよし、時節を待つもよし、決断はユダヤ側次第、合衆国は神の祝福を祈るのみと言う

だけで、支援など一切口にしなかった。アメリカはイスラエルが独立しても国家として育たないと言っているのがあった。執行部から見ると、本格戦争になった時誰も助けてくれないということである。

【次号へつづく】



ジョージ・マーシャル



モシェ・シャレット



アブダル・カデル・フセイニと救世軍

1937年長崎県生まれ。

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

